

★海外文献紹介★

カリキュラムを人間化するために

by David Elkind

ふくろうのことそして生活の質

by Vincent Rogers

Childhood Education

February 1977

「Childhood Education」の一九七七年二月号は、「カリキュラムを人間化するために」という特集のもとに極めて興味深い論文をいくつか集めている。今回は、その中からデイヴィッド・エルカインドの巻頭論文とウィンセント・ロジャーズの「ふくろうのことそして生活の質」の二つの論文をとりあげ、紹介していくことにする。

「カリキュラムを」人間化する」とか、「生活の質」の探究というテーマは、保育界の人々にたえず挑戦してくる古くて新しい、また現実的で非現実的な課題のひとつである。これまで多くの人々が青い鳥を求める如く、あるいはホビットの冒険よろしく課題解決にのり出したのであったが、途中で黒い鳥を青い鳥と誤ってつかんで帰ってみたり、手におえないドラゴンに会ったりで首尾よく課題解決に至った例は少ないのではなからうか。

「Childhood Education」の編集者は、魅力的ではあるが到達困難な今回のテーマの性質を熟知しているらしく、一級の執筆陣を揃えて、今、一度保育界の難題にとり組もうとしているようだ。はじめに二人の執筆者について簡単に紹介しておこう。

巻頭論文を受けもったエルカインド氏は、米国のピアジェ紹介

者として著名な心理学者であると同時に、子どもの全体的な発達に強い関心をもち、非常にバランスのとれた教育観の持ち主として知られている。また、第二の論文を担当するロジャーズは、米国における英国のインフォーマル教育の紹介者、推進者として活躍中の教育学者である。心理学者として、教育学者としてそれぞれに定評を得ている二人を執筆人に迎えた人選は申し分ないが、二人はどのように保育界の恒久的な課題にとり組んでいるか、内容を簡単にみていこう。

エルカインドはまず、カリキュラムについての自分の立場を表明するところからはじめる。「教育プログラムは、たとえばのようなものであれ、二つの基本的だが相反する人間の要求——個人的要求と結合的要求に合うものでなければならぬ」と。この立場では、カリキュラムの人間化とは、人間の二つの要求を対等に満たすことを意味するが、このような抽象論はひとまずおいて、現実の各種のカリキュラム改造の具体例に即して、人間化の途をさぐることにしている。エルカインドによれば、最近のカリキュラム改造は、次の三つの願望に基づいておこなわれているという。

1 既存のカリキュラムに「追加したい」願望

2 既存のカリキュラムから「とり去りたい」願望

3 既存のカリキュラムを「とり換えたい」願望

第一の願望は、「既存のカリキュラムは個人的要求を満たしていない」とみるときにあわれやすい。たとえば、六十年代のいわゆる認知中心のカリキュラム改革の反動として、七十年代に入って情緒中心のカリキュラム運動が一部におこっているが、これなど不足するものを「加えて」新しいカリキュラム作りを展開しているよい見本である。この情緒中心のカリキュラムは、変化しやすい子どもの情緒性に依存するため重心の固定がむずかしい。また、既存のカリキュラムに単に情緒面を上をせするだけなら教師の負担を増大させるだけのものとなりかねない等、問題点も多しと、エルカインドは指摘している。

次に、第二の願望は、「既存のカリキュラムは、社会的要求——すなわち社会適応に成功するために必要な諸技術の習得——を充分に満たしていない」とみるとき、教育プログラムの中から個人的要求を「とり去ろう」とする動きとなつて出てくる。たとえば、最近の「基礎に戻る運動」(Back to basics movement)は、その良い例で、この運動は「読み、書き、算術」以外のものを取り去り、学校は3Rsに専念すべきだという主張から起ってきた。

この運動の首唱者は、過去十年間の子どもの学力低下の原因は、学校が3Rs以外のことをやりすぎたためだとしているが、エルカインドはここには問題のすりかえがあるととして厳しく批判している。

つまり、過去十年間は、子ども中心より課題中心の構造的カリキュラム作りが叫ばれた時代である。その間に子どもたちの学力が低下したのなら、その原因は3Rsの無視ではなく、むしろ3Rsの強調しすぎ、あるいは教えすぎにあるといわなければならぬ。最近の「基礎に戻ろう運動」は、こうした誤った根拠に立って、芸術等の時間を「とり去ろう」としているが、このような行爲は社会的要求を満たそうとする自らの立場とも矛盾するものである。なぜかといえば、芸術は単に個人的要求を満たす活動であるばかりでなく、美を分かちあう社会的な要求をも満たす活動だからである。

さて、第三の既存のカリキュラムをとり換えてしまいたいという願望は、「既存のカリキュラムは個人的要求と社会的要求との統合に十分な注意を払っていない」とみるとき、二つの要求を調和させようとする形であらわれてくる。最近のインフォーマル教育、オープン教育は、その具体的なあらわれであるとして次のように指摘している。

「オープン・エデュケーションは、カリキュラムを変える試みである。個人と社会の要求を主張して互いに混乱させるのではなく、強化し相補なう試みである。」

エルカインドは、カリキュラムを人間化する具体例として、オープン・エデュケーションの試みをあげているが、これを実施する際のむずかしさの指摘も忘れない。

「立派な集団的個人指導というのは骨の折れる仕事である。教師は、教授を固定化したいという自らの衝動とたえず戦わなければならない一方で、もう一つの危険にさらされているのである。さまざまな活動を学校の他のものもろの活動と関連づけることを忘れるという危険に……」

そして最後にエルカインドは「カリキュラムを人間化する」ということは、子どもの要求 (need) と能力 (ability) をカリキュラム方程式に入れこむことを意味する」と指摘してこの論文を結んでいる。全体を要約すれば、エルカインドは、カリキュラムの人間化の目標を個人の要求と社会の要求の弁証法的統一におきながら、そこに至る三つの道筋とそれぞれの道筋で出会う困難、ある

いは障害物を読者に具体的に示し、あとは自分の子どもたちの要求と能力をみつめながら弁証法の旅に出ることをすすめており、「人間化」という理想郷への途を求めて模索している人々にとつて、この論文はよい。「道しるべ」を提供しているといえる。

さて、すでにオープン・エデュケーション（あるいはこれに類似した教育）の実践を通してすでに弁証法の旅に出ておられる方々には、次のロジャーズの論文が刺激となろう。

彼の論文は、まず「ふくろう」の話からはじまる。

ある日、子どもたち（二年生）が森で死んだふくろうを発見した、このふくろうを学校へもってきていろいろ話し合った結果、死んだふくろうを素材に、さまざまな活動の提言が起る。ある者は、ふくろうの身体の仕組みを知りたい、ある者はふくろうの生態を知りたい、またある者はふくろうの絵を描きたい……というように。

ふくろうの身体の仕組みを知りたいというグループは、お湯をわかしふくろうを煮たて、羽根と肉と骨とに分け、一片の骨も失うことなく、順序よく整べる作業にとり組む。ふくろうの生態を

知りたいというグループは、鳥の本や百科事典で研究をはじめ、やがて他の鳥の生態への関心もでてくる……。死んだふくろうとの出会いから始まって、約四週間の間にふくろうをめぐるさまざまな活動が展開したという。

これは、英国の一小学校でロジャーズ自身が実際に観察した事実で、数枚の写真がその事実を証明している。

ロジャーズは、このふくろうをめぐる諸活動の中に、「人間性のエッセンス」が含まれていると次のように指摘している。

「ふくろうをめぐる活動の間中、疑問は子どもたちから起り、部分的には社会科でもあり科学でもあり、読み書きでもあり、美術、等々でもある諸活動も、同様に子どもたちから発生してきた。ここには、学習における全体性と調和がある。……この経験は明らかに認識的成長と結びついているが、同時に子どもたちの感情や情緒性にもふれている。さらに、これらの活動は友だちや教師と分かち合い、交流し合う活動も伴っている。……」

このような人間性のエッセンスを盛りこんだ活動を米国の学校はまだとり入れていないという。米国の教育界には次のような偏見がそれをばんでいる、ということである。

テストの得点への盲信、教育に及ぼす社会変動の影響の無視、教授し学習を対立させる見方、そして人生の成功はテストの得点からは予測できないという沢山の研究の無視。

この中で、一番目と三番目の偏見は我が国の教育界でも共通のものがあるので、この問題に関する著者の極めて的を得たコメントを示してみよう。

「テストの得点は、子どもの学校での一日一日の質や豊かさについて何一つ教えてくれない。我々は教育での生活の質についてもっと沢山のことを知る必要があるのである。なぜかというとそれが子どもの価値や態度や興味に決定的な影響を与えているのだから……」

「……あたかも『人間的なカリキュラム』は、基礎的な技能の発達や3Rsや認知の発達と矛盾するものであるかのように、教授と学習とを二分化させてみる保守的な批判は、断じて受け入れ難い。真実は、人間性を重んじる人々は、二つは相たずさえてすすむと信じてきたことである。二つは、しっかりと結びついているものなのであり、先生たちに二つの内の一つを選ぶようしむける者は、先生にとっても、子どもたちにとっても同

様、実に有益な人々である。」

「もし学校が、子どもたちが読み・書きを学ぶにとどまらず、何かを理解し世話することを学ぶ場所であるなら、学校における子どもたちの生活の質は、おそらく彼らが後に大人として生きる生活の質と最も似かよったものであるにちがいない。」

エルカインド、ロジャーズの論文をよみつつけてみると、人間の途にしても、生活の質を探索するにしても、遊びか学習かとか、自由保育か一斉保育かの論争にみられる単純な二者択一ではないことに気づく。子どもの生活も、大人の生活に匹敵する複雑な様相をもつものである以上、子どもの生活を論ずる出発点を、複雑なものを全体としてとらえる視点にむかなければならないことを、二つの論文は共通に指摘しているように思われる。

(大戸美也子)

